

同経会報

- 秋号 -



第6回 しめた会

令和2年2月15日 からすま京都ホテル

講師：株式会社プロントコーポレーション
代表取締役社長 竹村典彦氏

2020年2月15日、からすま京都ホテルにて、同経会しめた会が実施されました。総計60名を超える経済学部若手OBが、株式会社プロントコーポレーション代表取締役社長 竹村典彦さん(同志社大学法学部卒業)のお話に聞き入りました。

同志社大学を卒業後、1981年サントリーに入社し、営業として叩き上げで東京下町の酒販店を駆け回っていた竹村さん。週末には、流行のお店を訪れ、知見と感性を磨かれていました。その中、当時の会長佐治敬三氏から、高級フレンチ「ル・マエストロ・ポール・ボキューズ・トーキョー」の総支配人に任命され、当時1食3万円を超えたという高級レストランは成功を収め、他にも多くの飲食店の開発に尽力されるようになりました。

その経験を経て、現在は「昼はカフェ・夜はバー」という二毛作ビジネスのPRONTO等を運営されています。「3歩先を睨んだ店舗展開は、早すぎて流行らない。0.5歩先を常に見据えた店舗展開・商品展開を実施することが大切である。」という言葉が一番印象に残りました。

私自身、京都に根差す地域企業からB to Cで、お客様へ商品を届ける仕事をしています。その為、3歩先でも1歩先

でもなく0.5歩先という、絶妙なニュアンスが響きました。作り手よがりになるのではなく、お客様がどのような商品をお求めているのか、という目線が大切であるということも学びました。

様々な形態の飲食店の運営にチャレンジされてきたこともお話し頂き、とても楽しく聞かせて頂きました。講演時間があつという間に、過ぎてしまいました。「やってみなはれ」というサントリー創業者鳥井信治郎氏のDNAがしっかりと受け継がれてきているんだと感じました。

講演後は、竹村さんより設営メンバーを四条烏丸のプロントへお誘い頂きました。私は、竹村さんが、直接買い付けに行つたという広島県産瀬戸内レモンを活用した、こだわりのレモンサワーを頂きました。爽やかなレモンの香りと、程よい苦みが口の中に広がり、とても美味しかったです。サントリーウイスキーを活用したハイボールをお勧め頂いたり、経営のお話も伺えて、とても有意義な1日となりました。改めて、貴重なお話と経験をありがとうございました。

文・同経会執行理事 しめた会副委員長

三輪幸徳(平成22年卒)



同志社エール飯

コロナ禍の現役学生を食で応援

同経会執行理事のfacebook「同志社今出川会」をはじめ多くの同志社関連サイトの世話人を務める早瀬孝行氏（昭和53年卒）が立ち上げた「同志社エール飯」はコロナウイルス禍の中で苦慮する同志社現役学生に向けて5月1日から配布を開始し、6月末までに累計で4500食以上が配布されました。

このプロジェクトは同志社のOB・OGから寄付金を募り、同志社OB・OGのお店を通じて、同志社の現役学生（同志社大学、同志社女子大学、大学院生）を対象にお弁当を無償配布するというものです。

寄付金は同志社士の会（公認会計士、弁護士等の士業グループ）の協力を得て「士の会」の口座に振り込んでもらい、OB・OGの寄付金をOB・OGのお店に投入、お店から学生に無償配布するという仕組み。

早瀬氏によると「『エール飯』を思いついたきっかけは、コロナ禍で苦慮する同志社の後輩である現役学生に何か自分出来る事がないかと考えた時、facebook等で1万人以上の同志社OB・OGに繋がりがあの中で協力を呼び掛けているけば……これならば実現可能であると

くの同志社OB・OG、ご協力いただいた各店舗、の皆様、このプロジェクトに様々な形でご協力をいただいた全ての皆様に感謝したいと思います。このエール飯を受け取った学生が、いつの日かまた後輩に支援をするのではと思います。」と語っている。

文・同経会執行理事 新村明男（昭和53卒）



自分の力を信じ学び続ける

愛知労働局



梶江美陽（小林千春ゼミ）



同経会賞をいただき、大変光栄に思います。同志社大学で過ごした四年間で多くの刺激と学びを得ることが出来ました。

特にゼミ活動で小林先生の熱心なご指導のもと、様々な知識や感性を持つ仲間とビジネスプランコンテストやディベート大会等の多くの活動に取り組んだ経験は、私の論理的思考力や相手に伝える力を大きく成長させてくれました。

現在、私は厚生労働省の出先機関である愛知労働局で国家公務員として働いています。公共職業安定所や労働基準監督署を有する機関であるため、常に「働く」ということと向き合いながら仕事をしています。

人々の生活の基盤であり人生の中でも大部分を占める労働に関わる仕事では、それだけ多くの人や企業の現状と将来に関わることとなります。

日々変わりゆく法令や制度を理解・遵守しつつ目の前にいる相手に柔軟に対応するのはとても難しいことですが、大学生活で培った力を糧にして論理的かつ相手に寄り添った姿勢で仕事が出来るように学び続けていきたいと思えます。

「地の塩」「世の光」を実践する

日本銀行



西浦希来（新関三希代ゼミ）

大学では多くの挑戦をし、充実した四年間となりました。特にゼミの仲間と日経STOCKリーグに出場し試行錯誤の末に大学部門賞を受賞した経験は私の人生を大いに支えています。

また、在学時には同経会賞をいただき、たいへん光栄に思います。新関三希代教授をはじめ熱心にご指導をいただいた教授方、成長の機会

同経会賞受賞者からの便り





を与えてくれた新関ゼミの皆さんには改めて感謝申し上げます。

現在は日本銀行名古屋支店にて発券業務に携わっています。入行当初は社会情勢が不安定でしたが、そのような中でも国民生活に不可欠なインフラを担う使命感を持ち、微力ながら発券業務の一端を担ったことは忘れがたい経験となりました。

今後は個別金融機関の調査や地域経済の調査等、全く別のグラウンドにも挑戦します。力不足を痛感する日々ですが、学生時代に培った学びへの姿勢や論理的思考力を礎に、経験と知識を積み重ねて中央銀行員としての知見の深耕に努めます。

そして、これまでお世話になった方々へ恩返しをしながら、「地の塩」「世の光」となり社会貢献の道を少しずつ歩みたいと思います。



課題を行う事で単位を取得できます。しかし、社会人では自ら考え課題を見つけ、行動しなければ何も前に進みません。もちろん上司の方のサポートもありますが、主体的でなければ自己成長できないと考えております。

新関先生が日頃から仰っていた「自ら考えること」の大切さを今では身に染みて感じております。

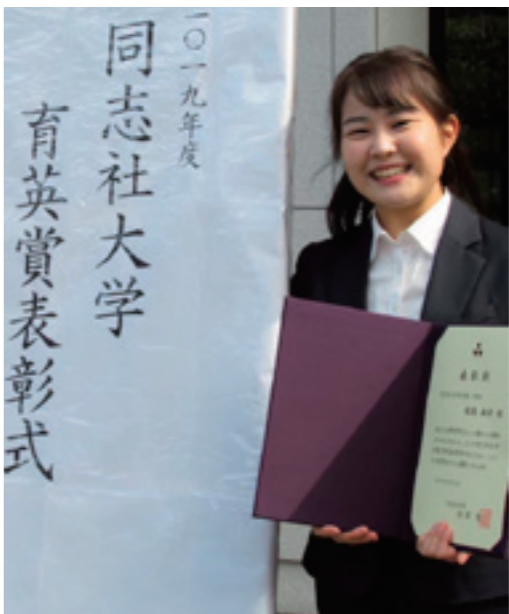
ゼミ活動でのディベート大会等を通して、学生時代からそのような機会を多く経験できた事は非常に貴重です。金融業界の変革期の中、国内外含め様々な業務に主体的に携わりたいと考えております。



学ぶ姿勢の礎



パナソニックコンシューマーマーケティング株式会社
福島由希 (小林千春ゼミ)



同経会賞を頂けたこと大変光栄に思います。同志社大学での学生生活4年間を振り返ると、非常に恵まれた環境で勉学に励むことができたと感じています。

大教室の一番前に座り、経済学の授業に臨んだこと。経済学部ディベート試合(テーマ:国は炭素税を強化するべきか否か)優勝を目指し、連日ゼミの仲間と集い、情報収集や討論を重ねたこと。ゼミ代表を務めさせて頂き、小林千春先生をはじめ仲間とともにゼミ活動を後輩へと繋いだこと。

最後となりましたが、熱心にご指導して下さいました先生方を始め、お世話になった方々に心より感謝申し上げます。

平凡な学生生活



大阪大学大学院経済学研究科
若林優弥 (茂見岳志ゼミ)



この度の同経会賞の受賞、大変光栄に思います。大学生活の4年間は特になんてことない、平凡な4年間だったと思います。講義に出席し、バイトをして、自由な時間を自分の趣味や友人との遊びに費やしました。なにか特別で素晴

振り返るとかけがえのない数々の思い出が蘇ります。

卒業後は電機メーカーの国内チャネルを担当する企業に入社し、現在半年間の研修期間にあります。

工場実習、修理サービス実習、家電販売店舗実習など、あらゆる現場で実習し、それらを経て人事の仕事に就きます。今後も学ぶ姿勢をもち続け鋭意努力いたします。

最後になりましたが、真摯にご指導いただきました先生方、目標に向かって切磋琢磨した友人たち、応援してくれた家族、お世話になった多くの皆さまに心より感謝申し上げます。

自ら考えることの大切さ



三井住友銀行
濱田浩輝 (新関三希代ゼミ)

同経会賞を受賞でき大変光栄に思っております。大学で培った経験は私の宝となり、仕事での軸となっております。

現在、私は対法人融資の部署に所属しております。昨今の金融業界では、融資のみならずお客様の多様なニーズを自ら見出し、具体化していく力が求められます。

この状況下において実感したのは、自ら考えることの大切さです。大学までは、用意された

らしいことをしたかと言えば、そうではありません。

しかし、そんな平凡な大学生活だからこそ、時間に余裕のある時期だからこそ、じっくり何かを考える、という時間を取れたのは貴重な経験だったと思います。

大学では、高校までの勉強のように、問題の答えを丁寧に解説してくれる参考書も先生もいません。読んでいる本でなにか分からないことがあったとき、自分で考える必要があります。答えの無い問題もあります。しかしそんな問題に出会い、うんうんと頭を悩ませながら、時には答えが出ずに自分の無能さに打ちひしがれながらも、長い時間をかけて思考を巡らせることは平凡な学生生活の中でもとても楽しい経験でした。そんな経験が今回の受賞に繋がったのなら、嬉しい限りです。

最後になりますが、自分のような人間に優しく接してくれた、友人、ゼミ生、そして茂見先生をはじめとした教員の方々に御礼を申し上げます。本文を締め括ろうと思います。本当にありがとうございました。





経済学部教授 図書館長

1968年愛媛県生まれ。1999年同志社大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。同志社大学経済学部助手、准教授を経て2014年から教授。2018年学部長、2020年図書館長。「現代の日本経済をはじめとする先進諸国の企業利潤率と経済停滞」が主要な研究テーマ。著書に『恐慌論の論点と分析』（共著、創風社）などがある。



谷村 智輝

他大学から同志社大学経済学部へ

私の生まれは愛媛県で、高校時代は理系を専攻していました。はじめは農学部を志していましたが、今の学生と同じように「つぶしがきくから」という理由で徳島大学へ入学、経済学の初歩を学び、さらに松山大学の大学院を経て、同志社大学の大学院経済学研究科博士課程（後期課程）に入りました。いくつかの大学を渡り歩いた末、ご縁あって本学にたどり着いたので

す。

ここで私は、大野節夫（おおの・さだお）先生の元でマルクス経済学の景気循環の理論を専門に学びました。これが私の今の研究の出発点となっています。

長い大学遍歴の最後に出会った大野先生は、最高の恩師でした。先生の手厚い指導が、研究者、そして教員としての私を成り立たせていると言っても過言ではありません。

先生は、非常に教育熱心である一方で、私たちの自主性を重んじ、何でも好きなことをやらせてくださいました。「既存の枠組みにとらわれていては未来はない。自分の専門と違う学派の本でもどんどん読みなさい」というその大らかなスタンスがとてもありがたかったです。

先生は、いつも少し大きめのクリップボードを持ち歩いていらっしやうって電車に乗るときな

どは、その上に白い紙を置いて、思いついたことをメモされていました。そんな先生の学問への情熱、研究への姿勢を心から尊敬しています。1999年に助手になって以来20年間、こ同志社大学経済学部にて奉職させていただいていますが、心の奥底にはいつも、几帳面にメモを取っている先生の姿があります。

学生たちと格闘しながら

はじめて本学の教壇に立った当時、私はまだ経験も浅く、いま振り返ると学生との適度な距離がわかりませんでした。学生たちとは先輩と後輩のような間柄で、授業がひけるとお酒を片手に熱く語り合ったり、時には意見を戦わせた

りしながら、組んず解れつ、格闘するようにして学びを深める日々でした。

「右へ行け」と言うのと左へ行くような、一筋縄ではないかない学生ばかりでしたが、共に学びの枠組みを作っていく楽しさがありました。

今では、私が学生たちよりだいたい年長になってしまったこともあり、昔のままというわけにはいきません。当時と違って、指示したことを素直に聞いてくれるようになったのはいいものの「センセイ」「教授」とすっかり祭り上げられてしまい、学生との間に距離ができてしまった感じがして、少し寂しく思っています。

この秋から受け持つゼミ生で19期目になり

ます。この20年で500人あまりを教えることになりました。みなそれぞれの道で頑張っており、今も慕ってくれる学生が大勢います。

学生のモチベーションをどう上げるか

経済学部に来る学生の印象としては、基本的には真面目で素直。一定の枠組みさえ示せば、あとは自分で創意工夫をして楽しみながら研究を進めていく人が多い気がします。ゴールさえ決めれば頑張れるのです。

ですが難点は「これをやりたい」というモチベーションを持って入学してくる人が少ないこと。いわゆる「自分探し」のために、とりあえず大学に進学してきたという人が多いんです。これは同志社だけではなく、どの大学の経済学部にも共通する傾向です。こうした学生のモチベーションをどう高めてあげられるか、ということが長年の課題です。

経済学部に限らず、最近の学生には「役に立つかどうか」を基準に行動するタイプの人が多く感じます。学生だけでなく、社会全体にこの傾向が強くなっている気がします。「わからなかったことがわかる」のが知の営みであるとしたら「役立ち基準」は、学問の本質とは少し異なると言えるでしょう。また、効率をアツプしたり問題を単純化してクリアにすることは大事ですが、知の営みが昔に比べて窮屈になって

いるという感じは否めません。役立ちだけを常に意識しなくてはいけないというのは、ある意味、不幸なことだと思います。

純粋な学問の真理と、実社会での「役立ち基準」の間のバランスをどう取り持つかはとても難しいテーマですが、学生のモチベーションを上げるための取り組みとして、私は授業で、できるだけ現実社会で起きている問題を取り上げ、議論するように心がけています。それから、同経会のみなさんのような、実社会で活躍するOB・OGを講師として招き、現場のリアルな話を学生に聞かせることも重要になってきます。

大先輩からのメッセージ

私が駆け出しの教員だった頃、本学の元総長で、偉大な経済学者である住谷悦治（すみや・えつじ）先生の門下生とお話する機会がありました。その先輩たちが卒業する時、住谷先生は、はなむけの言葉として、こんなメッセージを彼らに送られたのだそうです。

「卒業しても読書の習慣をつづけなさい。1週間に1冊、世間の評価の高い本を読みなさい。それが無理なら2週間に1冊、それも無理であれば1ヶ月に1冊。どんなに忙しくても、少なくとも1年に1冊は良い本を読んで自分の糧としなさい」。

私はこの話にとっても感銘を受けて、自分のゼミ生が卒業するときも住谷先生にならって「1週間に1冊は良い本を読みなさい」と話すことにしています。

同志社の魅力とは

本学の創立者・新島襄は、明治21年に『同志社大学設立の旨意』を記し、学校設立に向けた思いを高らかにうたいあげました。

私は、学部長に就任した際、この『旨意』を読み込んだ上で、改めて、本学経済学部の特徴と魅力について熟考してみました。学部長として、ステークホルダーとなる外部の方々に向けて、本学部の魅力と強みを言語化する必要があったからです。本学部の良さは何か。第一に、学生と教員との間に人間的なふれあいがあり、キャンパスがあなたたかい空気に満ちていることです。京都の中心にある、この歴史あるキャンパスで、多様な個性を持つ人たちと触れ合い、言葉を交わす中で人間性を陶冶していく経験は、何にも代え難いものであると思います。第二に、学び方に多様なアプローチがあること。軸になる科目はきちんと持ちながら、多様な分野のエキスパートが揃っており、様々な方面から知識、教養を深められることが、本学部の大きな強みだと思っています。第三に、多方面で活躍する卒業生の分厚い存

在が、かけがえない資産と言えます。こうした面でも、同経会の皆様には、この分厚い資産を結びつけ「ネットワーク化」することにご尽力頂いていて、学部の一員として大変心強く感じてきました。

新島先生は『旨意』の中で「ただ技術や才能があつて勉強のできる人ではなく人徳がありバランスのとれた精神性をそなえた人間を育てることが目的である」ということを述べています。この創立者の精神が脈々と受け継がれ「人のあたたかさ」と「学びの多様性」という本学部の独自の魅力となり現れているのだと感じます。

同志社の良さは、キャンパス内だけにはとどまりません。本当の意味での「同志社らしさ」が発揮されるのは、むしろ卒業生となり社会に出てからかもしれません。

「同志社の学生の社会でのあり方は、トップに立つて組織を引っ張っていくのではなく、社会を支えて実際に動かしていくことだ」こう仰ったのは、経済学部の大先輩、島一郎（しま・いちろう）先生でした。最終講義にて学生たちに優しく語りかけておられました。

新島先生が『旨意』の中で「一国を維持するのは決して二、三の英雄の力だけではなく、知識、品性があり自立し、自ら治めることができ『一国の良心』とも言ふべき国民であり、私たちはそうした人々を養成したい」と述べてい



多くの国民が創始者を知っている大学というのは数少ない。他大学から教員になったからこそわかる“同志社のよさ”がある



のとまさに同じことです。「トップをとれ」じゃないのです。前に出て華々しく注目を浴びる人ばかりでは社会は成り立ちません。実際に同志社の卒業生には、縁の下の力持ち的な、着実、堅実な活躍をしている人が多いと感じます。新島先生の精神がここでも生きていたのだなど、しみじみ思いました。

ストレス解消法は走ること

ところで、よく「教員として、つらいことや大変なことはありませんか？」と聞かれることがあります。特にありません(笑)。好きなことをやっているのですから。しかし、元々の性

格は、落ち込みやすくヨクヨクしてしまうところがあります。それが変わったのは、ランニングを始めてからです。毎回10キロ、土日は20キロぐらい走るようにしています。京都の基盤の目状の区画は、ぐるっとランニングするにはもってこいなんですよ。走るとスッキリするし、何よりヨクヨクせず前向きになれる。走り始めてからは、失敗しても不思議と「まあいいか」と悩みを引きずらなくなりました。走っています。走っている間に考え事もはかどりますし。

コロナが可視化する社会課題

いま、コロナウイルスの大流行が日本中を混乱させています。

オイルショックが経済の構造を転換させたように、コロナもまた、経済の大きな構造変化をもたらすだろうと思います。

なくて、コロナを契機として、経済や社会にもっと潜んでいた問題が顕在化したのです。先送りしてきたことが露呈しているにすぎないのです。大学教育、働き方、産業構造、社会保障等々、私たちはこうした課題の顕在化に直面して、どのような方向に進むのか、選択の岐路に立っているのです。

危機的状況である今こそ、もう一度初心に立ち返り、新島先生の思い描いた未来の日本、そして国民の姿がどのようなものであったか、もう一度再確認する必要があります。

新島先生の熱い思い、そしてその志を受け継ぐ本学卒業生たちが作り上げてきた分厚いレガシーを、決して焼尽してしまわないよう、さらに末広がりに次の世代へと伝えていくことが、私たち、同志社大学の教員、そして同窓会の皆様の共通の使命であるはずですが、コロナ禍を逆手に捉えて、ともに手を携えて、新たな時代の生き方を提案していかうではありませんか。どうか引き続き、お力添えをよろしくお願いいたします。(文責・広報委員会)

コロナはこれを契機として、経済や社会にもっと潜んでいた問題が顕在化された。先送りしてきたことが露呈しているにすぎない。



新任の先生ご紹介①

経済学部 教授 太下義之



新任の先生ご紹介②

経済学部 准教授 笠井高人



新任の先生ご紹介③

経済学部 教授 三俣学



今年の四月より教鞭をとっております、太下義之おしたよしのきです。私の専門分野は「文化政策」です。このように自己紹介すると、「なぜ経済学部なのに文化政策？」と思われるかもしれませんが、実は、近年の都市理論である「創造都市論」においては、都市が経済的または社会的に発展するためには、「創造性」というキーワードに象徴される、文化的資源の存在とその振興政策が不可欠だとされているのです。こうした背景のもと、講義としては、文化政策論、創造都市論、コンテンツ政策論、文献購読、演習(ゼミ)等を担当する予定です。

これからの社会づくりに寄与できる人材を、この同志社大学から一人でも多く羽ばたかせていきたいと思えます。

4月に経済学部に着任いたしました。助教として勤務した母校で再度教鞭を執れることは私にとって望外の喜びです。

専門は経済思想史・経済学史で、20世紀の人物であるカール・ポランニーを主な対象とし、知的交流や足跡と思想の形成過程を調査しています。また、経済学方法論や経済哲学・社会思想といった近接分野にくわえ、前任校が教育学部だったこともあり、経済(学)教育にも関心があります。

本年は新型コロナウイルスの拡大により、社会情勢が安定せず、不安な日々が続いています。が、このような時でも、微力ながら同志社の研究・教育の推進に尽力する所存です。どうぞよろしくお願い致します。

今春、同志社大学経済学部に着任いたしました。私は、本学の経済学部、経済学研究科の修士課程までお世話になり、その後、京都大学大学院で学んだ後、神戸にある兵庫県立大学で、16年教鞭をとって参りました。2000年に京大大学院に移って以来、20年ぶりに学び舎に戻ってきたことになりました。専門は、いかにして持続可能な経済を構築するかを考究するエコロジー経済学です。とりわけ、地域の自治力を生かした環境資源の利用や管理、それに根差した地域づくりについて、理論だけでなくフィールドワークを通じて研究しています。新型コロナウイルス禍ただ中での着任となりましたが、私の国内外での経験を同志社での研究・教育活動に生かしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。





同志社大学経済学部 同経会

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL: 075-251-3524 FAX: 075-251-3136
URL: www.dokeikai.com

2020年9月15日 発行
編集: 同経会 広報・編集委員会
発行人: 同経会会長 服部盛隆